

わかっちゃいるけどやめられない

坂田三允（長野県看護大学）

最近、世界は暗いニュースで覆われている。明るい話題、ほっとする話、心が和む話も身のまわりにはたくさんあるのだけれど、先行き不安な日本の経済状態、地球温暖化、米国とイラクの対立、官僚などの汚職事件、中学生による教師刺殺事件、高校生の同級生刺傷事件など、これから世界はどうなっていくのだろうと考えざるを得ないようなニュースが重くのしかかって、喜びや楽しさがディスカウントされてしまうように感じるのは私だけだろうか。

日本の経済や米国とイラクの対立などに関しては、私ごときが考えてもどうにもならないことだけれど、1人の人間が起こした問題なら自分に照らして考えられる。どうしてこんなことが起こってしまうのか、人間の行為とはどのようにして生じるのかを、私なりに理解したいと思って手にしたのが、この書『小説・倫理学講義』であった。看護倫理、生命倫理など私たちの周囲には「倫理」があふれているけれど、実際のところ、私は倫理学に関する基本的な知識は皆無に近かったから、専門的な学術書であつたら最初から手にしなかっただろう。小説という形でなら理解できるかもしれないという期待と、魅力的な目次に引かれ読み始めたのである。

けれどもその結果、私は悩みが増えてしまったような気がしている。この書は、たとえばどういう行為が不倫（“失楽園”のことだけではない。倫理・道徳に反する行ない全般を指す）で、どういう行為なら道徳的に許されるのか、また犯罪行為に対してどういう倫理的な裁きが可能なのか、あるいはわれわれの民主主義信仰には

どのような合理的根拠があるのかなど、さまざまな問題を投げかけてくる。それに対する唯一の答えなどは用意されていない。

読み終えて私のなかに強く残ったのは、“道徳的に許されない行ない”は「わかっちゃいるけどやめられない——それが我々のおかれている現実なのだ」という主人公の言葉であった。言葉による議論の場ではどのような正論も言えるし、観念のうえではあるべき世界も作り得る。けれども、現実の生活はきわめて利己的な人間によって営まれている。そんなとても当たり前のことを、私は改めて考えた。

また主人公は語る。「社会の全員がきれいな自然環境を好んでいる場合……自然環境に関する彼らの評価的判断はおのずと一致し、この判断は規範的拘束力をもつ道徳的判断として機能して、社会的に大きな力をもつことになるはずだ。……ところが実際には、そうはならない。……我々の文明は……おのれの身体から自立して増殖を続け、おのれの身体を死にいたらしめるまで増殖をやめないあのガン細胞のようなものだ」と。

突破口はないのだろうか。たともう手後れだったとしても、私たちは、それぞれが置かれた場で、自分にできる最大限のことを、それは単に無駄な電気をつけないという小さなことであってもよい、何かをしつづけることはできるのではないか。コミック雑誌の連載のなかに「子どもたちは未来からのお客さま」というフレーズがあった。子どもたちには少しでもちゃんと生きているところを見せたいなあとと思う。▲



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。